

第三の神のことば 「主の名をみだりに口にしてはならない」

出エジプト 20:7、マタイ 1:21～23

赤江弘之牧師

はじめに。

今はアドベント。主の名は「インマヌエルと呼ばれる。」主の名は臨在のしるし。

1. 主の名を呼ぶこと

そもそも神の御名は、燃え尽きない芝の中でモーセに明らかにされたときに始まる。神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と」(出エジプト 3:14)。

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは『アバ、父』と叫びます」(ローマ 8:15)。

2. 「みだりに」の意味

ある国語辞典によれば「みだりに」というのは、「規則に外れたこと、法で定められたことを無視して勝手なふるまいをすること」と説明されている。この「法」とは、難しいことではなく、食事の作法のような場合に通じることである。「みだりに」の意味は、心を全然伴わない、空虚な心で神の名を使用することを指している。

3. 神の前で礼拝の民として生きる

今回のはじめに、第三の神のことばは「礼拝の態度」あるいは「心の在り方」を教えている。それは、礼拝において真実さが求められていることを意味する。

4. イエス・キリストの御名

神の名は空虚ではなく、神の実体的存在そのものを意味し、神の御名のあるところには神の臨在があることを意味している。それは旧新約聖書全般に共通している。

(1) 旧約聖書において

I 列王記 8 章 1 6 節である。「わたしの民イスラエルをエジプトから導き出した日からこのかた、わたしは、わたしの名を置く家を建てるために、イスラエルの全部族のうちのどの町も選ばなかった。わたしはダビデを選び、わたしの民イスラエルの上に立てた」。ヤハウェはその名を置かれたところで民と会見し、民を赦し、民の願いを聴かれたのである (同 8:28～53)。

(2) 新約聖書において

主イエスは地上における最後の祈りをささげられた。ヨハネによる福音書 17 章 6 節「あなたが世から選び出して与えてくださった人たちに、わたしはあなたの御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに委ねてくださいました。そして彼らはあなたのみことばを守りました。」

使徒ペテロがエルサレム神殿の美しの門で奇跡を行ったときに語った言葉が、使徒の働き 3 章 6 節に記されている。「すると、ペテロは言った。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。また、同じ 9 章 15 節で主ご自身がアナニアによって語っておられる。

御名が聖なるものとされますように

先に拙著「私なりの『主の祈り』」において、第一の祈り「御名が聖なるものに」について述べた。「十戒」の第三の神のことばは、まさに主の祈りの最初の祈りであつた。

5. 宣誓・誓いと関連

キリスト教のある教派は、この第三戒を盾にしてあらゆる誓約を禁じている。その根拠にマタイの福音書 5 章 33 節～34 節を挙げている。「また、昔の人々に対して、『偽って誓ってはならない。あなたが誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。」

これは行き過ぎである。ここで主イエスが「決して誓ってはならない」と言われた誓いとは、主の名をもって誓いさえしなければ守る義務はない、と考えて、天や地やエルサレムをさして軽々しく誓っていた当時のユダヤ教的誓いであつた。「主の名を出しさえしなければ」と言うような言い逃れをする当時のユダヤ教徒に「そんなに守りたくない誓いなら、いっそのこと誓うな」と、叱っておられるのである。

むすび

神の名は、くだらない戯言に使われたりする。その最たるものは「オーマイガー！」である。「Oh! my God」は驚いた時、衝撃を受けた時、怒った時などに使われている。神のみ名が神に関係のない感情表現になってしまっている。“なんてことだ。” “まあ、お気の毒に” “えっ嘘でしょ”

賛美と祈りで御名を大いにたたえたい。

「私はあなたの名を代々にわたって呼び求めよう。それゆえ国々の民は世々限りなくあなたをほめたたえよう」(詩篇 45:17)。「【主】に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざをあらゆる民の間で」(同 96:2～3)。